

防潮堤外側の街心配

東京湾を最大級の津波が襲った
らどなるのか。東京都内で最

東京湾岸ルポ

大11層浸水すると予測する早稲田
大理工学術院の柴山知也教授(海
岸工学)と、東京湾岸を歩いた。
(井上幸一、小林由比)

「あたかも普通の街
区に見えますよね」。
こう言う柴山氏の顔が
少し曇った。

東京都中央区豊海 交う埋め立て地だ。十
町。水産会社の冷蔵倉 階建て以上の住宅など
庫が立ち並び、冷凍 も多数あり、公園で子
車やトレーラーが行き どもたちが遊んでい

る。

柴山氏の研究では、
東京湾内で高さ二層以
上の津波の場所もあっ
たとする慶長地震(一
六〇五年)のデータに
照らすと、この辺りの
浸水は七十五センチほ
どだ という。

津波を防ぐ防潮堤の外
側にあるから。もとも
と防潮堤は市街地を守
るため造られたが、当
時は防潮堤の外側に入
る暮らすことを想定し
ていなかった。
柴山氏は横浜港では
最大四層の津波を予測
しているが、「東京で
は建物の二階以上に

れば生命は大丈夫」と
し、「防潮扉が道路を
横切るように設置され
ている所では、扉が閉
まって道路が寸断さ
れ、車も通れなくな
る。行政が住民に対応
を通告しておくことも
大事だ」と話す。

②面に続く

狭い川幅 怖い津波浸水

①面から続く

「津波が二層を超えると、川幅が狭いこの辺ではさらに大きくなる。津波はこういうところであふれる」

満開の桜が美しい、東京都品川区の目黒川河口から約三百メートル上流地点。早大理工学術院の柴山知也教授（海岸工学）が声を上げた。川の堤防からメジャーを垂らし、満潮時の水面までの距離を調べると約三層。柴山氏は川の北側、北品川周辺の低い土地が浸水する可能性がある」と予測する。

目黒川には津波を防ぐ水門がない。川幅が狭いため、水門を設置すると大雨の際に上流から来る水の障害物となり、水があふれるた

目黒川など水門なく・湾奥ほど高い水位

めだ。河口に水門がないのは港区の古川も同様で「住民に浸水の可能性がある」ことを知らせ、建て替え時には一階部分を住居スペースにしないなど、地域の安全性を高めていくしかない」と指摘する。

柴山氏の分析では、過去の大地震で東京湾に最大の津波をもたらしたのは、江戸初期の慶長地震（一六〇五年）。このデータに基づくと予測では、海の幅が狭くなる湾の奥ほど津波は高く、港区の日の出頭は岸壁にぶつかった津波が陸に上がり、一層浸水するとシミュレーションした。日の出頭では、浅草やお台場へ向かう水上バスの乗り場に、出発を待つ中国人観光客が集まっていた。柴山

ふ頭 コンテナ漂流の危険



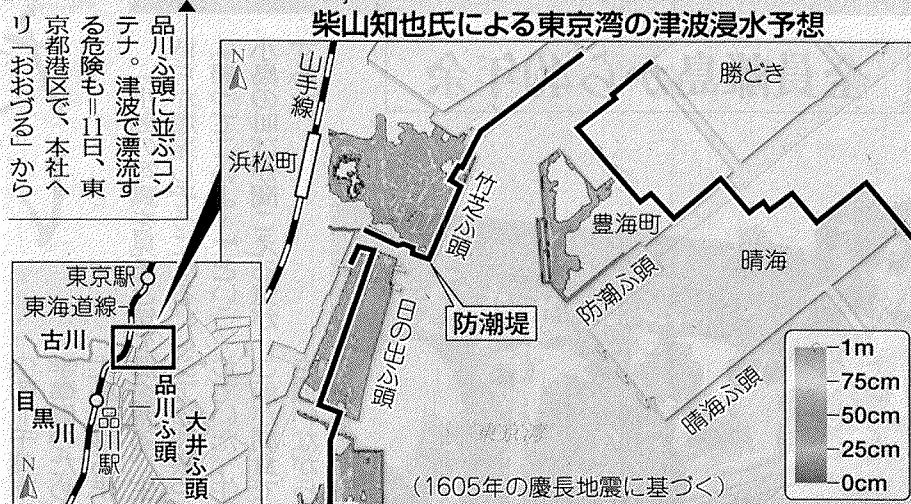
防潮扉の海側にも集合住宅がある豊海地区＝11日、東京都中央区で

いるが、あるマンション業者は取材に「地盤の弱さや液化化への対策は講じているが、正直、津波はノーケアだった」と認めた。大量のコンテナが並ぶ大井ふ頭。柴山氏は「中身にもよるが、一層ぐらいの水でコンテナが漂流する危険性がある」と指摘。東日本大震災の被災地の港で、コンテナが流されが建物側と協定を結んだ。外国だ。建物はかさ上げの様子で脳裏によみがえった。

氏は、隣にある三階建ての東京港管理事務所、や近くのビルを指さし、「ああいう場所に間近に望む中央区晴海し、高層マンションがで、コンテナが流されが建物側と協定を結んだ。外国だ。建物はかさ上げの様子で脳裏によみがえった。」と指摘した土地に造られては



柴山知也氏（しばやま・ともや） 1953年生まれ、東大卒。東大工学部助教授、横浜国大工学部教授を経て2009年から現職。津波や高潮など、海岸で発生する災害のメカニズムを研究している。スマトラ沖地震（04年）やチリ大地震（10年）など、世界の被災地で現地調査を実施。神奈川県津波浸水想定検討部会の部会長を務める。



国は首都直下型地震で、都内で最大震度7を予測。中央防災会議の有識者会議は南海トラフで最大級の地震が起きた場合、都内の津波を最大二・三メートルとしている。

柴山氏は「津波の高さは防潮堤を下回っているが、防潮堤や水門が無事かどうか」。都は現在、津波想定の見直しを進めるとともに、防潮堤などの耐震化工事を行っている。構造物に頼るだけでなく、人の命が奪われることのないよう、避難場所の確保などの対応が必要だと感じた。

(井上幸一、小林由比)